

賞月感時事作 : 文苑

著者	笠間, 梧園
雑誌名	龍南會雜誌
巻	29
ページ	55-55
発行年	1894-10-01
URL	http://hdl.handle.net/2298/4440

よふばかりある。昔のなまがしが大聲にもまさりつへし。さるほどに、夕日もこがねの峰にてうかいやきつゝ、おちゆくめる。かの山のはにげてんどねもふもかひあし、とくに歸るまぎして、さかのばれば、第一級のをしへ子ども猶をばしまに倚りて、たのれらをまち顔なり。そのうちひとりふたりかちわたりきて、やよ人目をよきて通るとあ、こゝは税關のある所ぞ、あらためすばひとりもどほすまじとて、舟ひきよせたる中々れかし。舟よりのばれば、おのゝ杯もちきて、すゝつゝ飲みかはすほどに、いさよひの月も、松のぼこしに尋ねきて、さよき流の夕波にすめる。うの涼しさ、今一入のながめなりければ、こゝにてこそは、例の一番をと望む。すきのかたあれば、いさやとて杯さしつゝ、汲むや心もいさぎよき、江津の川瀬のみあかみはと、所によせて、謠ひいづれば、皆人拍子とりて、うち興することかぎりあし。さてることをたち出て、出水神社にいたりて、築山の月のけしきなとうちあがめ、三々五々聲はからかに、江津に水あみ、出水にすゝみとによびつゝ歸るも、心ありげにてゆかし、村を出つせば、はやからうたなとうたなふ聲の、ゆくての方にはのきこゆるもありし。

賞月感時事作

教授 笠間 梧園

船渡遠江洋

雷雨過時夕霏収。吟望此夜不堪秋。想看東海一輪月。分照支那四百州。

水天相拍若無涯。扶筇唯看碧波。未信賴

翁詩膽大。纔過蒼海唱雲耶。

西征雜詠（其一）

崎陽客舍偶作